

東京大学と東京を離れるにあたって

岩村 秀 (化学専攻)



私は、昨年10月1日付けで本務が九州大学有機化学基礎研究センターとなっており、本年3月末日まで本理学系研究科を併任させていただいた。3月の最後となる教授会の席上ご挨拶申し上げ、九州のことに触れたが、その後で二、三の先生方から九州のご出身ですかとのお声を掛けていただいた。ご推測のとおりであり、東京で生まれはしたものの、初中等教育は全て宮崎市で受けた。宮崎師範学校附属小学校、中学校（現宮崎大学教育学部附属）から宮崎大宮高等学校（旧宮崎一中）へと進み、ここを卒業した。東京大学には、当時で年4～5人、現在10名前後平均して入学している。理学部教授会では、地球物理の日高孝二先生が先輩にいらっしゃったぐらいではなかろうか。同じ小中高校を卒業してきた後輩の中から、最近横綱の婚約者が現れびっくりした。一中の割にはリベラルな校風でのびのびと育てられた。教育熱心な優れた物理、化学、生物の先生がおられて、生徒を引き付ける授業が行われ、理学への方向付けが行われた。この間、福岡は九州の最大で文化水準の高い都会であるというイメージをもって育ってきたので、今回の九大転勤には全く障壁を感じることはなかった。

昭和40年代に日本学術会議がその設立を答申し

たにもかかわらず未だ実現していない国立大学共同利用機関の一つに、基礎有機化学研究所がある。有機化学基礎研究センターは、九州大学の理学部、工学部の化学の先生方がイニシアティブをとり、化学の先行国立大学共同利用機関である分子科学研究所および全国の有機化学者の支援を得て、研究所の芽が取り敢えず全学の共同利用センターとして発足させたものである。研究所の設立に向けては、かつて東大理学部では、島村 修先生、大木道則先生が推進運動で中心的役割を果たされた。後続の私どもの世代はやや怠けていたとの誹りを免れず、今回の人事は、受身の表現をすれば有機化学基礎研究センターに人質として取られた、積極的表現をすれば東大から乗り込んで行ったこととなるのではなかろうか。いずれにしても、このセンターを組織、研究活動の両面から充実させ発展させ行く責務をひしひしと感じている。

まだ専任となって半年ではあるが、東京を離れて活動をはじめ、いくつか認識を新たにすることがある。一つは、地方における国立大学教官のステイタスの高さであり、国立の機関への関心の深さである。九州大学の先生方の地方行政、文化における発言力、影響力は絶大である。またわれわれのセンターが独立した暁の設立場所に対して、複数の地方自治体の誘致運動が、水面下で活発に始まっている。しかしながら、良いことづくめではないことにも気がついてきた。大学教官のステイタスの高さは、絶対数の少ない希少価値によるところも多々あり、その結果、九大を停年退官される先生方の第2の人生の機会はかなり限られており、ご退官後教育、研究に関連した定職についておられない方が目につく。大変残念なこと

である。東京では、希少価値がない代わりに機会も多いのではなからうか。

もう一つは、母校をはじめとして地方の高校をまわり、校長先生および理科の先生方と懇談する機会をもつことができたが、その際口を揃えて言われた。地方で地道に教育が行われている現場では、優れた知能と学力と集中力を兼ね備えたいいわゆる優秀な生徒は依然として理数科に興味をもち、理数科への進学希望をもっているとのことである。青少年の理系離れというのは、都会および進学校の歪められたトレンドでしかなく、地方ではあまりピンとこないということである。うれしい話ではないか。しかしながら、さらに話を聞くと、都会の新しいトレンドは、10年遅れで地方にもやってくるので、行く行くは地方の高校でも「理系離れ」が始まるのではないかという危惧の念がないわけでもない。地方の高校における「理系離れ」を防ぐために、われわれにできること、注意しなければならないことがあるように思える。まず「理系離れ」「理系離れ」とお経のようにキャッチフレーズを流さないでほしいと高校の先生方はいう。このようなニュース、評論は、感覚的なキャッチフレーズに敏感な青少年に、理数科志望の自分達は流行遅れなのではないかという懸念を与えるだけでメリットはない。理学の面白さを解き、21世紀に期待される彼等の役割を説明

し、「理学の栄光は不滅です」と理系志望を鼓舞するには、研究の実績をもつ先輩の地道な啓蒙運動において他にはないと極言される。われわれの所属する日本化学会は、最も重要な支部活動の一つに化学教育啓蒙活動をあげており、訪問講義なども行っている。その中でも、中高校生の先輩にあたる本学の教官、大学院生が数年に一度でよから母校にもどって講義、講演、懇談会をもつことができれば最も有効であろう。特に世間的に著名であるというわけでもなくお声が掛からないからと引っ込んでいないで、積極的に出向いてもよいのではなからうか。

逆に、昨今の経済、産業界の不況からくるリストラで出向、転職、退職を余儀なくされている人材に、理工科系出身者が多く、同年代の他の分野に比べて割を食っているという評価を青少年の親の世代および中学高等学校の先生方もつようなことがあると、「理系離れ」は留まるところを知らないであろう。言うは易く行うは難しの最たるものかもしれないが、理工科系出身の余剰人材の活用の道を開く努力も、当事者の救済だけではなく、次の世代の人材確保のために忘れてはならないことである。

有機化学基礎研究センターの用務もさることながら、東京を離れることでより身近となる「機会」を楽しんで行きたい。

